

(みちのものがたり) 平成のみち 岐阜県関市 車列2キロ 「狂騒曲」で幕開け

有料会員限定記事

2019年3月2日03時30分



(左) 観光で、長男湊都(みなと)ちゃんと道の駅平成を訪れた平井望、絵理香さん夫妻。「平成の最後に息子が生まれてよかった」(右)平成(へなり)地区に残る売店跡=いずれも岐阜県関市



この道で2キロを超す車の渋滞が起きると想像した人は皆無だったに違いない。元号が平成になるまでは――。

1989年1月7日、岐阜県武儀(むぎ)町の税務課長補佐だった若田鉄三(てつみ)さん(68)は土曜出勤をし、新元号発表の会見を当直職員とテレビで見っていた。午後2時36分、小淵恵三官房長官が掲げたパネルには「平成」と墨書されていた。若田さんは一瞬、こう読んでしまった。「へなり？」

町内の平成(へなり)のことだ。標高381メートルの平成(へなり)山に水源をもつ清流づたいに9戸35人が暮らす平成(へなり)谷の集落で、地域の住居表示にもない小字(こあざ)の地名。武儀町企画商工課長だった村上忠一(ちゅういち)さん(77)は車のラジオでニュースを聞き、予感した。「大変なことになる」

昭和天皇が逝去。「自粛」の空気に満ちた列島で、この町だけは違った。平成(へなり)を一目見ようと、見物客の車が多い日は2千台近くに達した。観光バスも訪れ、幹線の県道58号関金山(せきかなやま)線から平成(へなり)に向かう町道まで車列が続いた。土産品は小淵長官を表敬訪問した際に贈った特産の原木栽培のシイタケぐらい。プレハブの売店を急ぎよ設け、「平成しいたけ」と命名し売った。地元郵便局長だった美濃羽治樹さん(68)は「全国からシイタケの注文がひっきりなしに舞い込み、発送に追われた」。

町は「平成武儀町音頭」をつくり、カセットテープにした。「平成」と刷った金色のテレホンカードも売った。愛知県明治村、岐阜県の大正村と昭和村の先例にならい、改元の2年後に「日本平成村」を宣言した。元号橋や平成自然公園の建設、「道の駅平成」の登録……。新元号の記念事業の一部に、国から「ふるさと創生事業」で交付された1億円を投入した。

昭和30年、富之保、中之保、下之保の3村合併で生まれた武儀。町長選は旧3村間で激戦になる。日本平成村の構想を主導し、町商工会長だった山村誠示(せいじ)さん(86)は「旧村同士による政争の町を下之保の平成(へなり)を象徴にして『内平らかに外成る』にしたかった」。そんな町も平成17(2005)年、関市に編入合併された。

*

改元後、押し寄せる見物客はしばらく絶えなかった。中部読売新聞(現・読売新聞中部支社)の入社2年目の記者は車で平成(へなり)に日参し、過熱ぶりを伝える続報を書いた。「平成(へなり)」と唯一表示されていた林道標識の盗難事件は全国ニュースに。騒動を機に町内の鉄工所が作った標識のミニチュアも売れた。「昭和を総括して読者に課題を示す記事を書きたかったが、平成フィーバーの記事ばかり求められた」

この記者は後年、バブル崩壊後の日本経済でうごめく外資系投資ファンドを扱った小説『ハゲタカ』シリーズの作家、真山仁さん(56)。平成(へなり)に張り付いての取材は1カ月ほど続き、その年の秋に退社した。作家活動では阪神大震災や福島原発事故も小説の題材にし、平成の日本社会のひずみに光を当ててきた。

「今、平成（へなり）のことを振り返って書くとすれば、平成の幕開けに狂騒曲を奏でた日本を俯瞰（ふかん）し、のちに続く時代を考察する内容になると思う。5月に新たな元号で次の時代を迎えるからと言って、経済が混乱した30年と大震災の30年を忘れてはならない」

■次代開くかヤジロベエの地

そもそも、平成（へなり）に地名の由来はあるのだろうか。

関市を含む中濃地方の高校で地理教諭を長年務め、地名を研究してきた土屋一さん（74）によると、豊臣秀吉による太閤（たいこう）検地当時の文書に「遍（へ）なり山」、江戸時代後期の文書には「平成」と記されている。「平成（へなり）には、村から離れ、山から続く平地のように緩やかに広がる土地の意味があるのでしょうか」

古老からの聞き取りをもとに平成15（2003）年に刊行された昔話集『武儀町のむかし話』は、雨乞い儀式で「天下太平成就五穀豊穰（ほうじょう）万民和楽請願」と書いた大木が護摩台の火で焼け焦げ、雨露で「平成」だけが残ったと伝える。ただし、いずれも定説にはなっていない。

関市中之保の丹羽政則さん（75）によると、武儀地域は県内屈指の昔話の宝庫だという。「鬼が落とした大石」「城山（じょうやま）の白狐（しろぎつね）」といった話も収録した昔話集は、この町におとぎ話がしっかりと受け継がれてきた証でもある。丹羽さんらのグループは、ゆかりの地を案内しながら道を歩く催しを開いている。

「土地の記憶を地域に根づかせる営みなのです」

一昨年11月は趣向を変え、ドングリでヤジロベエを作る体験教室を組み込んだ。

理由がある。

5年に1度の国勢調査で発表される日本の「人口重心」。国民全員が同じ体重と仮定したうえで、ヤジロベエの一本足のようにより平衡を保てる地点を指す。つまり「日本の真ん中」ともいうことができ、それが武儀地域にある。旧美並（みなみ）村（現・郡上市）から移ったのは平成12年。以来、3回の国勢調査で旧武儀町内を6・1キロ、ほぼ南東に動いた。

*

岐阜県山県市に先祖代々の墓がある歴史人口学者、鬼頭宏・静岡県立大学学長（72）は「人口重心が南東に引っ張られているのは、東に人口が増えている首都圏、南に自動車産業で雇用が創出されている名古屋圏があるためだと考えられる」と解説する。

平成の合併時に4161人だった武儀地域の人口は今年2月までに3170人に減った。関市からの転出先は岐阜市や名古屋市などが際立つ。

鬼頭さんは考古学の知見も生かし、縄文時代から現代までの人口重心の軌跡を日本地図に描いたことがある。縄文晩期に現在の長野県北部にあったが、弥生時代は琵琶湖の南に。近代に入ると滋賀県からほぼ東に向かって移動した。「この軌跡は大都市の行きすぎた過密の指標にもなり得る。今は東京一極集中。均衡のとれた日本列島の人口分布を考える必要がある」

「日本の真ん中」で列島の行く末を考えられないか。記者はそんな大風呂敷を広げ、2月に県道58号と関市道を車で走り平成（へなり）に入った。集落の奥の元号橋は欄干の白い塗料が所々はげ、林道を通ってたどり着いた平成自然公園の遊歩道は枯れた雑草に覆われて東屋（あずまや）の屋根はこけむしていた。平成時代に形作られた風景はなんとも寂しげだった。

谷間の日は早く落ちる。集落に戻ると、たそがれ時になっていた。改元のころに7戸あったシイタケ農家は今、田畑和義さん（64）のみ。周囲は高齢のせいで栽培をやめ、後継ぎはいないという。

住民も17人に半減した。ただ、このうち5人は社員の伊藤了（さとる）さん（38）一家。山あいの自然環境にひかれて3年前に名古屋市から田畑さん宅の隣の空き家に引っ越し、妻と3人の子どもと暮らす。「集落の人たちの心は温かく、都会で受けるようなストレスを全く感じないのが一番」と伊藤さん。田畑さんは「子どもたちの声が集落に響くのが何よりうれしい」と言う。

定住を考えている伊藤さんは、田舎暮らしの価値が見つめ直される次代の到来を願う。そう
なれば、平成（へなり）はこの30年とはまた違った物語を紡ぎ始めるかもしれない。

（文・辻岡大助 写真・飯塚悟）

■今回の道

岐阜県道58号関金山線は関市中心部から富加町、関市武儀地域、七宗（ひちそう）町、下
呂市金山町までの45キロ。

県道などを「花街道」に指定して整備している県が平成3（1991）年、7番目の花街道
「平成こぶし街道」と名付けてコブシやハクモクレンを沿道に植えた。平成（へなり）は県道
58号から関市道に入り、800メートルほど進むと集落が見え始める。

その先の平成（へなり）川に架かる元号橋＝写真＝からは林道平成（へなり）～祖父川線。
2キロ弱で平成自然公園＝写真＝に至る。

■ぶらり

関市下之保の「道の駅平成」（0575・49・3750）は県道58号沿いにあり、「日
本平成村」の中核施設だ。平成8（1996）年に登録された。特産品や土産物の売り場では
平成記念グッズのほか、シイタケをチップスにした「椎茸（しいたけ）すなっく」も人気。改
元直後の旧武儀町の「平成フィーバー」を報じた新聞記事や日本平成村立村の資料を展示する
「ふるさと館」や軽食レストラン、リハビリ用の超音波が流れる足湯も備える。裏手の「しあ
わせの氣（き）の森」は、専用の用紙に梵字（ぼんじ）入りのコインを載せて池＝写真＝に浮
かべ、沈む時間で吉凶を占うパワースポット。今春、池にヒノキの橋を新設し、平成から次の
元号の時代の架け橋にして渡り初めをする予定だ。

平成27（2015）年の国勢調査で人口重心となったのは関市中之保の山の斜面の民有地
だ。（写真は県道58号沿いにある案内板。近くに駐車場がある）

関市下之保の日龍峯寺（にちりゅうぶじ）（高澤観音）にも立ち寄りたい。本堂＝写真＝は
鎌倉幕府の「尼將軍」北条政子の寄進とされたが、応仁・文明の乱で焼失し、江戸時代前期の
寛文10（1670）年に再建された。京都・清水寺に似た舞台造りで「美濃清水」の異名を
もつ。

一方、多宝塔は鎌倉時代を代表する建造物の一つで、国の重要文化財に指定されている。北
条政子が寄進した。

■味わう

道の駅平成北側の食堂「平成福楼」の看板メニューは「しいたけカツ丼」。平成（へなり）
の田畑和義さんが朝収穫した大型・肉厚のシイタケを使う。ご飯の上に敷かれた千切りのキャ
ベツに衣で揚げたシイタケが載り、甘いみそ味のソースがかかる。みそ汁、茶わん蒸し、フル
ーツ、漬物付きで税込み600円＝写真。

黒からあげ定食（同880円）はシイタケ粉とヒジキ粉を使った真っ黒な鶏の唐揚げで、関
市の新たな名物料理だ。午前11時半～午後1時15分（ラストオーダー）のランチ限定。水
曜定休。

■読者へのおみやげ

道の駅平成で買った平成記念品（タオルハンカチ、メモ帳、ハガキ）を7人に。住所・氏
名・年齢・「2日」を記し、〒119・0378 晴海郵便局留め 朝日新聞be「みち」係
へ。7日の消印まで有効。

◆今回は、東京から九州に至る縦断ロケを行い、日本初の本格的ロードムービーと称される
映画「憎いあんちくしょう」（1962年）を追います。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際
条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or
republication without written permission.

